

木の香りに魅せられたこだわりの住空間を自分たちで決める

ログハウスセレクト 2018

最新実例特集

全国各地のログ&キットハウスを紹介

大誠ムック48 定価 1,500円

ログハウス&キットハウス
本誌連動HP

ログハウスファン 検索



DIY HAND TOOL LESSONS 木工工作をやってみよう!!
子供だって、初めてのDIYでモノ作り
各種電動工具の扱い方を覚えて、いざ実践

暖かさ&美味しさ Life

薪ストーブで料理する楽しみ

ログハウス購入前に知っておきたい“あれこれ”
ログハウス相性テスト「Yes or No」



選び抜いたWood Life



キッチンからリビングを見る。対面キッチンは奥様のお気に入り。



和室は、おじいさん、おばあさんのため。お仏壇は、友達の建具屋さんが作ってくれた。



玄関に入った吹き抜け。右がリビングで左は水場。

「ログハウスを建てたそもそもの始まりも、彼のツーリングにあるんですよ」
聞けば、こういう話。
今から、およそ30年前、ドラマ「北の国から」に憧れて、北海道に走りに行った若き小川・藤原両青年。行き先は富良野。そこで見た五郎さんの丸太小屋に、小川青年はすっかり心を奪われてしまった。
「建てるなら、絶対、ログハウスだ！」
それから早幾年。構想は進まず。
立会証人・藤原さんもしびれを切らし「いつ建てるんだ？」なんてからかったりも。
夢は夢で終わるかにも見えたが、60歳を手前に考えさせられることが起こる。
友達の病気や別離。釣りやバイクのお友達を相次いで病気で亡くしてしまった…。
「やれる時に、建てよう…」
固い決心が生まれた。
まずはログビルダー探し。雑誌やインターネットで色々と当たってみた。その中で、気になるメーカーが引っかかる。
広島のサエラホーム。
早速、見学したいと連絡。建築事例を色々見せてもらった。その中には、本誌の姉妹紙「キットハウス16」で取り上げた広島・三次市のピザ屋さんもあった。
「中を見て、素敵だなと思いました」
標準プランの間取りがほぼイメージにピッタリ。和室もあり、両親にもいい。価



奥様と娘さんが貼ったステンドグラス。

見上げる棟木はセフルビルドの証 親友と組み上げた憧れの木の家

実例紹介 3

小川邸
島根県・奥出雲町



小川隆さん(左)、藤原敏治さん(中)、小川さんの奥様(右)

いつか建てたい。きっかけは富良野で見た五郎さんの家。それから早幾年、やるなら今しかない、と決意。夢を夢で終わらせずに、本当によかった。



南側から正面をみる。基礎は、雪や湿気の対策のために、サエラホームのアドバイスで高くした。



玄関を内側から見る。



デッキの庇は藤原さんのオリジナル。



屋根が付いているエントランスはなかなか広い。



北側からみる。だいぶ背が高い印象。突き出た棟木は小川さんのお気に入り。

実はこの家、お友達とたった二人でセルフビルドしたものだという。
「初めは、一人でやろうと思っていたんです。でも、素人には大変かなと思いついて心強かったのが幼稚園からの高橋までずっと同じで、一緒にバイクのツーリングチームまで作った大の仲良しが、経験30年の大工になっていったという。
「彼がいなかったら、できなかったですね」
取材時は、その御仁・藤原敏治さんも、同席してくださいました。

きっかけは30年前のツーリング
サエラホームのプランで実現

神話のふるさと奥出雲町。
ここは、また、西国屈指の米どころでもある。名にし負う仁多米は、稲穂を垂らして黄金に山あいを埋め尽くし、台風シーズンを目前に、家々は刈り取りに精を出す。
広がる田園風景の向こう側、赤茶のログ壁映える木の家が悠々と姿を現した。シンプルなフォルムだけど、なかなか大きい。見上げる背丈に、突き出る棟木が頼もしい。
「太い棟木が外から見えてほしいよ？」
「太い棟木が外から見えてほしいよ？」
とは、オーナーの小川さん。農機具の手をしばし止めて、我々を迎えてくれた。消防士の傍で田んぼを営む兼業農家さんだ。

田園風景に悠々と現る
赤茶のログ壁映える木の家



高さのあるフリースペースは開放感が広がる。



階段上から2階フリースペースを見渡す。頭上には人力で上げた棟木が。



2階、屋根の下の収納はかなり広い。



2階の個室。むき出しの棟木が存在感を放つ。



気持ちのいいリビング。中央テーブルは手作り。色は奥様のセンス。



和室は2部屋。障子窓の木枠はセトリングを考慮した藤原さんの手作り。

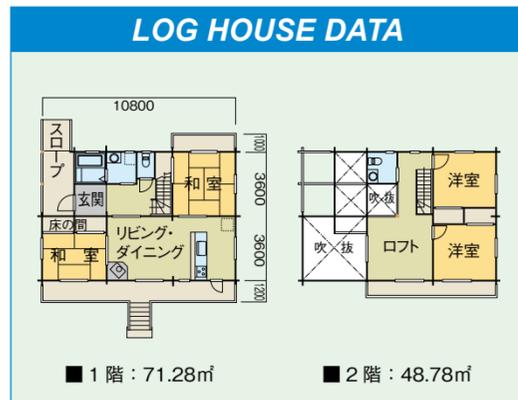


デッキ貼りはすべてご主人。

オーナーさんからの“一言”
 メーカーさんのアドバイスは頼りになります。業者選びもそれが決め手の一つでした。例えば、ここでは湿気、雪、地形、景観などを考えると基礎を高くした方がいいと教わりました。暮らし始めて実際にその通りで、サエラさんにして良かったと思いました。

「2階まではロープで上げました」
 これは、消防士ならでは、小川さんのロープと滑車の専門技術が役に立った。
 2階からは、更に足場を作り、まず、片側をそこに載せる。それをシーソーのように動かして、更に高い位置にある梁にもう一方を載せる。もう一度同じ動きで、最後は、棟の位置に収める2本の束柱へ。
 それぞれに1人ずつ付き...
 「よし、タカシ、そっち上げる！」
 「ムリ！」
 二人の男が巨体相手に七転八倒、ようよう収まるべきところに収まった。
 「いやあ、感動しました！」
 「二人で、よう上げたなあ...」
 二人の労を労うべく、奥様も上った棟をキレイに磨いてくれたそう。だから、最終的に天井材に隠さないことにしました。
 「せっかくだから見せることにしました」
 他にも苦労はあった。屋根貼り前に張った雨よけシートは強風で5回も飛ばされた。屋根貼りは8月中旬の猛暑の盛り。アスファルトシングル材も溶け出す暑さで1日中。
 「心が折れそうになりました(笑)」
 家族の助けも大きかった。
 サンダーがけと塗装は奥様と二人で隅から隅まで。内壁は帰省した息子さんと娘さんも加わって家族総出。特に、念入りだったのはヒノキのキッチン・カウンター。藤原さんが三重の材木屋さんで入手したものだ。
 「トシジ君が『生きるも死ぬも塗装次第』と脅かすんですよ。ヒヤヒヤしながら、塗っ

て削ってを6回もやりました」
 好きなバイクも釣りもおあずけで、かかりきりになるご主人に代わり、田んぼはおじいさんが面倒を見てくれた。おばあさんは、お茶を淹れてみんなを労ってくれた。
 こうして1年、完成の「その日」が訪れたのは、今年の3月のこと。
 「楽しかった！自分たちでやった！素人でもできるんだ！と思いました」
 木の家は、やはり、いい。
 窓を開けて風が抜けると別世界。
 完成前、2月から住み込みで作業したが、冬もあったのだ。それに、静か。
 雪景色の中、色が映える遠望は印象的。
 「いい家です。本当に」
 みんなでやってみたら、できたこと。夢を夢で終わらせずに、本当によかった。



■取材協力：株式会社サエラホーム TEL.082-256-4550